

環境報告書

2011



筑紫地区

総合理工学府・研究院

応用力学研究所

先導物質化学研究所

健康科学センター

中央分析センター

産学連携センター

電離気体実験施設

炭素資源国際教育研究センター

伊藤極限プラズマ研究連携センター

トップメッセージ

社会に開かれた大学としての環境配慮活動の推進に向けて



筑紫地区協議会議長 本庄 春雄

九州大学筑紫地区は、大学院総合理工学府・研究院、応用力学研究所、先導物質化学研究所、健康科学センター、中央分析センター、産学連携センター、電離気体実験施設、炭素資源国際教育研究センター及び伊藤極限プラズマ研究連携センターの部局で構成されたキャンパスで、約1,000人の教職員・大学院生からなる事業場です。

筑紫地区は、福岡市の南部に隣接し、福岡市の中心部から交通至便の地域にあります。この筑紫地区周辺は、戦後30年間米軍用地として接收されていた用地でしたが、接收解除に伴い、昭和51年6月国有財産北九州地方審議会において住居地を含む文教及び健康・憩いの場として総合的な再開発をすすめる転用計画の策定により、昭和52年6月本学用地として約190,000㎡の転用が決定されました。さらにその後、隣接地の一部が本学に転用されるなどして、現在では約257,000㎡のキャンパスとなっています。

筑紫地区は、この転用計画の趣旨を踏まえ、周辺地域環境との調和を保ちながら高度の教育・研究を行い、かつ地域住民にも貢献する開かれた大学としての新キャンパスとしてスタートしました。

筑紫地区は、九州大学の一つのキャンパスとして、本学の環境方針の基本理念に則り、環境問題に関する教育・研究を推し進めるとともに、広く国内外から理工系学生を受け入れ、物質・エネルギー・環境の融合分野における環境共生型科学技術に関する総合的大学院教育を実践しています

2011年（平成23年）7月
筑紫地区協議会議長 本庄 春雄
（大学院総合理工学研究院長）

目 次

トップメッセージ

第1章 環境配慮活動に向けて

筑紫地区概要	1
環境方針	2
環境マネジメント体制	3
環境活動計画と目標	4

第2章 環境教育・研究と環境保全

環境に関する研究組織	5
環境に関する教育組織	6
新入生安全教育	7
公開講座	8
筑紫地区における環境保全	9
環境月間行事	10

第3章 エネルギー・資源の削減

エネルギー消費量と削減活動	11
資源・エネルギー廃棄物	14
グリーン購入	15

第4章 化学物質の管理

実験系廃棄物	16
有機系／無機系廃液量の経年変化	17

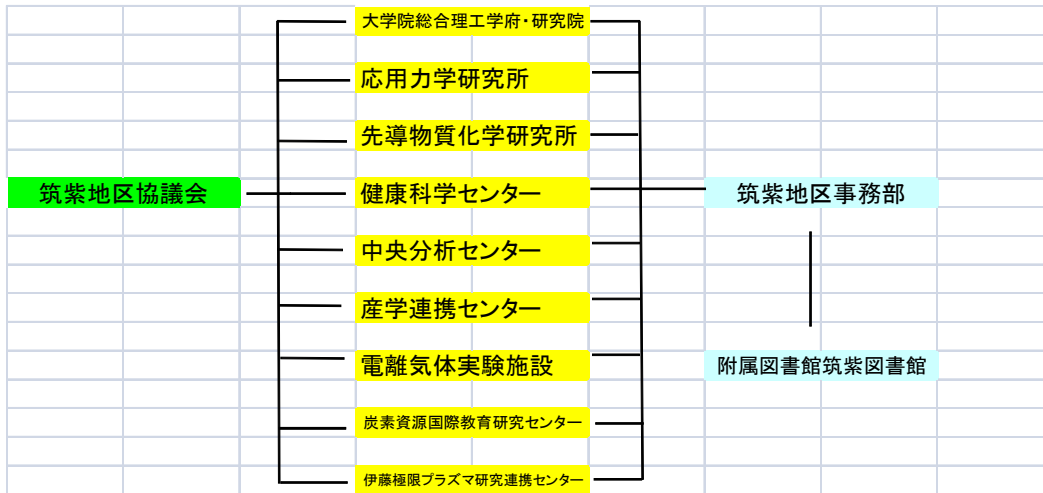
第1章 環境配慮活動に向けて

筑紫地区概要

事業所名 国立大学法人九州大学筑紫地区
所在地 〒816-8580 春日市春日公園6-1 TEL 092-583-7502
URL <http://www.tj.kyushu-u.ac.jp/> (大学院総合理工学府・研究院)
<http://www.riam.kyushu-u.ac.jp/> (応用力学研究所)
<http://www.cm.kyushu-u.ac.jp/> (先導物質化学研究所)
<http://www.ihs.kyushu-u.ac.jp/> (健康科学センター)
<http://www.bunseki.estm.kyushu-u.ac.jp/> (中央分析センター)
<http://www.astec.kyushu-u.ac.jp/> (産学連携センター)
<http://plasma.ence.kyushu-u.ac.jp/re-plasma/> (電離気体実験施設)
<http://cr.cm.kyushu-u.ac.jp/> (炭素資源国際教育研究センター)

沿革

- 昭和56年12月 生産科学研究所移転
- 昭和57年 8月 総合理工学研究科及び健康科学センター移転
- 昭和58年 9月 応用力学研究所移転
- 昭和57年 4月 中央分析センター設置
- 昭和62年 5月 機能物質科学研究所設置(生産科学研究所廃止)
- 平成 2年 3月 電離気体実験施設設置
- 平成 6年 6月 先端科学技術共同研究センター設置
- 平成15年 4月 先導物質化学研究所設置(機能物質科学研究所廃止)
- 平成15年10月 産学連携センター設置(先端科学技術共同研究センター廃止)
- 平成20年 4月 炭素資源国際教育研究センター設置
- 平成21年10月 伊藤プラズマ乱流研究センター(現 伊藤極限プラズマ研究連携センター)設置



構成員 教職員・学生 1,014名(平成22年5月1日現在)
[内訳] 教職員 417名(教員155名,事務職員29名,技術職員34名,その他199名) 大学院学生597名(修士課程444名,博士課程153名)

環境報告対象の組織

大学院総合理工学府・研究院, 応用力学研究所, 先導物質化学研究所, 健康科学センター, 中央分析センター, 産学連携センター, 電離気体実験施設, 炭素資源国際教育研究センター, 伊藤極限プラズマ研究連携センター, 附属図書館筑紫図書館, 筑紫地区事務部

報告期間

この「環境報告書2011」に記載している内容は,主に2010年度(平成22年4月1日から平成23年3月31日)の取り組み,実績値を中心にまとめている。

第1章 環境配慮活動に向けて

環境方針

九州大学の環境方針

基本理念

九州大学は、地球未来を守ることが重要な課題であることを認識し、環境に配慮した実践活動を通じて、地球環境保全に寄与する人材を育成するとともに、地球に環境負荷を掛けない社会を実現するための研究を推進する。

活動方針

九州大学は、以下に掲げる活動方針に従って、環境目的、目標、及び計画を定め、環境活動の実施状況を点検・評価することにより、継続的環境改善を図ることとする。

(環境マネジメントシステム構築)

1. 部局ごとに環境マネジメントシステムを構築し、環境に配慮した活動に積極的取り組みることにより、環境に優しいキャンパスの実現を目指す。

(構成員)

2. 学生及び教職員は、本学に関係する事業者や地域住民とともに、環境に配慮した活動に積極的に取り組み、本学はこれを支援する。

(環境に関する教育・研究の充実)

3. 地球環境に関する教育カリキュラム及び環境負荷低減のための研究を、総合大学としての特長を生かして充実させ、地球環境の保全に寄与する。

(法令遵守)

4. 本学におけるすべての活動において、環境関連の法令を遵守し、環境汚染の防止や温室効果ガスの削減等に努める。

(コミュニケーション)

5. 環境に関する情報を学内外に伝えるため、環境報告書を作成、公表する。作成にあたっては法令に関する重要な情報を虚偽なく記載することにより信頼性を高める。

この環境方針は、すべての学生、教職員及び関係事業者に周知させるとともに、ホームページ等を用いて広く開示する。

平成18年3月31日

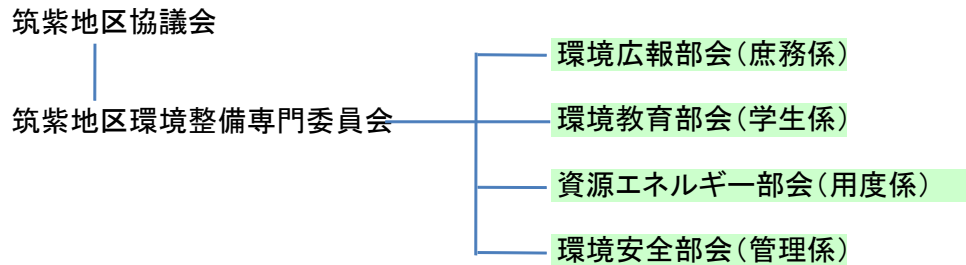
九州大学総長 梶山 千里

筑紫地区の環境方針

本学の環境方針を踏まえ、環境に対する学生・教職員の意識を高め、また、文教及び健康・憩いの場として総合的な再開発がなされた筑紫地区キャンパスの環境をより良いものとするため、教育・研究を通じて地球環境へ配慮し、地域や社会の環境負荷の低減に貢献することを目指す。

第1章 環境配慮活動に向けて

環境マネジメント体制



環境部会の分担役割と筑紫地区の主管部署

- 1. 環境広報部(主管:庶務係)**
環境報告書の作成・公開
環境関連公開講座, 社会連携事業の把握
その他環境関連行事の広報
- 2. 環境教育部会(主管:学生係)**
環境関連の授業の把握
新規入学者に対する環境・安全教育
大学院生参加の環境保全関連活動支援
- 3. 資源エネルギー部会(主管:用度係)**
ごみの分別, 古紙回収
グリーン購入・調達
生協等, 関連事業者との環境活動
- 4. 環境安全部会(主管:管理係)**
化学物質の管理, 集計, 報告
特別管理産業廃棄物の管理
排水・廃液・廃棄物等の管理

第1章 環境配慮活動に向けて

環境活動計画と目標

本学の環境報告書に示された具体的な取り組みを基に、平成22年度に実施した取り組み及び平成23年度目標を以下に示します。

事項	具体的な取組	平成23年度目標
組織・体制	筑紫地区エネルギー管理専門委員会を設置し、エネルギー管理標準を策定した。	エネルギー管理標準に従い、エネルギー使用量削減について委員会で検討、実施する。
温暖化対策	建物延床当たりのエネルギー使用量を前年度比1%以上削減した。	建物延床当たりのエネルギー使用量を前年度比1%以上削減する。
資源・循環	「九大WEBリサイクルシステム」を利用して物品の効率的活用を図ることを周知した。	引き続き「九大WEBリサイクルシステム」を利用して物品の効率的活用を図る。
グリーン購入	九州大学グリーン調達方針に基づき、環境配慮型製品を優先的に購入した。	引き続き九州大学グリーン購入調達方針に基づく調達を行う。
化学物質管理	化学物質(薬品)管理システムの運用方針に基づき管理を行った。	引き続き化学物質(薬品)管理システムの運用方針に基づき管理する。

第2章 環境教育・研究と環境保全

環境に関する研究組織

大学院総合理工学研究院は、理学と工学を融合した新しい学問体系である「理工学」分野の研究院であり、平成10年度に環境調和型社会の構築に貢献する研究と人材育成の推進を目指して大幅な改組拡充を行いました。

また、大学院教育を担当する大学院総合理工学府の責任研究院として、その教育理念を支える理工学研究を積極的に推進しています。すなわち、物質・エネルギー・環境を3本柱として、理工学の視点から3者の融合した分野における地球環境との調和のとれた次世代の科学技術に挑戦し、長期的視野に立った未来志向型・創造型の戦略研究を展開しています。

大学院総合理工学研究院において環境をキーワードにして研究・教育を行っている部門は、次のとおりです。

部門名	講座名
エネルギー環境共生工学部門	流動熱工学講座、熱環境工学講座
流体環境理工学部門	流体環境学講座

【エネルギー環境共生工学部門】

本部門は、多様な高速流動の計測と数値解析によって流体の流動エネルギーの利用促進とその効率化を図り、さらにバイオマス燃料などを用いた新しい低公害エンジンシステムの開発等の研究、及び多様な熱移動解析によって都市空間の熱環境形成機構の解明とその制御手法の確立を図り、さらにパッシブ手法に基づく省エネルギーと快適性を高度に満足される住居空間の開発等の研究を行っています。

【流体環境理工学部門】

本部門は、人類の生命環境を維持している地球環境圏が直面している危機に対する方策を確立するため、フラクタル物理学、宇宙・天体プラズマ物理学、あるいは流体物理学や環境流体力学、さらには海岸工学や海洋力学の視点に立った研究を行っています。

さらに、上記以外にも、合金、半導体、ガラス、セラミクスなどの結晶質と非結晶質のナノスケールの構造解析と制御により、すぐれた特性を有する材料の開発及び光機能・超微量物質の検知機能など有用新機能材料の設計と創成並びに核融合や核分裂を利用した先進的核エネルギーシステム、水素、太陽エネルギー等の多角的利用を目指した新型エネルギーシステムの開発等の研究を推進しています。

応用力学研究所では、これまで蓄積してきた力学的研究を基礎として、地球環境問題の深刻化に対応する研究を推進するため、地球環境の保全と新エネルギーの開発に全国の研究者を結集し、「新エネルギー力学」、「地球環境力学」及び「核融合力学」の三研究部門と「東アジア海洋大気環境研究センター」、「高温プラズマ力学研究センター」の2附属センターを設けています。

先導物質化学研究所では、ナノテクノロジー、環境・エネルギー、バイオ・ライフサイエンスなどの21世紀を支える先端産業技術の礎として必要不可欠な、「物質化学における先導的な総合研究」を展開するため、「物質基盤化学」、「分子集積化学」、「融合材料」及び「先端素子材料」の四研究部門を設けています。

産学連携センターでは、プロジェクト部門で、地球環境保全、環境計測、新エネルギー開発、省エネルギー技術などに関連した高性能で実用性の高い新規なデバイス、装置、プロセスなどの発案・設計・開発・評価を行うことによりエナコロジー社会の実現に貢献できる先端的、創造的プロジェクト研究を行っています。

第2章 環境教育・研究と環境保全

環境に関する教育組織

大学院総合理工学府は、大学院総合理工学研究院、応用力学研究所及び先導物質化学研究所の3部局を教育の責任部局として、さらに、産学連携センターのプロジェクト部門が教育に参画しています。

そして、「物質」・「エネルギー」・「環境」及びその融合分野における環境共生型科学技術に関する高度の専門的知識と課題探求・解決能力を持ち、持続発展社会の構築のためにグローバルに活躍できる技術者や研究者となる人材を養成する。」ことを、教育の目標としています。

各専攻の教育の目標は、次のとおりです。

専攻名	教育の目標
量子プロセス理工学専攻	量子効果を利用した科学技術の急速な進展が、自然と調和のとれた社会発展へとつながるよう、先端的な物質やデバイス、及びそのためのプロセスなどの基礎となる科学技術の追求を通じて、次世代の優れた人材を育成する。
物質理工学専攻	物質に関連する理学と工学を総合的にとらえ、物理・材料・化学の学問分野を統合し、物質科学の新展開を追求する一方、環境共生型物質科学の推進によって、次世代を担う高い創造力と広い視野をもつ人材を養成する。
先端エネルギー理工学専攻	新型エネルギー開発や基礎学理に関する学際的な教育と研究を行い、21世紀のエネルギー問題解決に向け指導的役割を担う、広い視野と創造力を持った人材を養成する。
環境エネルギー工学専攻	環境負荷の低減や資源エネルギーの有効利用、省エネルギー技術やこれらに基づく環境共生型社会システムの構築に関する研究を通して、次世代を担う人材を養成する。
大気海洋環境システム学専攻	地球環境科学と自然流体力学を基礎にして、我々の生命環境を維持する大気海洋圏が直面している未曾有の危機に対する方策の確率を目指す広い視野を持った人材を養成する。

第2章 環境教育・研究と環境保全

新入生安全教育

大学院総合理工学府では、安全衛生教育を修士課程の授業科目として開設し、新入生全員に受講させ、安全教育の徹底を図っています。

安全衛生教育は、学府共通の教育、専攻共通の教育、研究室独自の教育と、各人の研究環境に応じた教育を実施しています。そして、この安全衛生教育の全てのコースを受講し、「レポート」と「安全管理に関する確認書」を提出した後、研究活動を開始することができます。

学府安全衛生教育（担当：副学府長）

安全教育の趣旨、必要性、教育システムの概要を説明します。

専攻（グループ）安全衛生教育（担当：専攻安全委員 他）

学府が編集、発行している冊子「安全の指針」に基づいて、安全衛生管理、廃棄物、化学物質、電気、機械類、ネットワークなど、具体的な項目ごとに講義を行います。

- 1 安全衛生管理システムの説明、励行事項の説明、事故発生時の連絡網と処置
- 2 排水と廃棄物の処理
- 3 化学物質の安全と管理（化学薬品、高圧ガス）
- 4 電気の安全対策
- 5 光とX線の安全対策
- 6 機械類の安全な取り扱い
- 7 計算機の安全管理とネットワークセキュリティ等

研究室安全衛生教育（担当：各研究室）

研究室特有の事項に関して、安全教育を行います。研究室教育の一例として、

- 1 研究室特有の実験や装置毎での使用法や注意点の説明
- 2 工作機械の取り扱いに関する講習会と実習の義務づけ
- 3 X線機器の取り扱いに関する講習会、実習、健康診断の義務づけ
- 4 研究室や実験室周辺の安全・避難器具の使い方
- 5 学生教育研究災害傷害保険加入の勧誘
- 6 「安全教育に関する確認書」の提出指導

第2章 環境教育・研究と環境保全

公開講座

筑紫地区では、毎年、大学院総合理工学府において、一般市民を対象に「環境」をテーマとした公開講座を開講しています。

平成22年度に実施した公開講座は次のとおりです。

講座名	「グリーンエネルギー技術の最前線」
開催期間	平成22年7月31日(土)、8月7日(土)(計2回)
受講対象者	一般市民(高校生を含む。)

化石燃料の枯渇と地球環境問題が顕在化しており、環境に大きな負荷を与えない、大気汚染物質や二酸化炭素等の排出が無い安全なエネルギー、すなわちグリーンエネルギーへの転換が求められている。

本講座では、化石資源から水素、次世代エネルギー技術に至る最先端のグリーンエネルギー技術の研究動向について解説した。

【プログラム】

第1回

- ・石炭を高効率に電気に変換する技術
- ・水素の使い方と作り方
- ・リチウムイオン電池の過去、現在、未来

第2回

- ・太陽電池の原理及び技術と研究動向
- ・有機系太陽電池
- ・廃熱のエネルギーを電気に変える～熱電発電の現状と可能性～

第2章 環境教育・研究と環境保全

筑紫地区における環境保全

【安全管理体制】

筑紫地区の安全管理体制については、九州大学職員安全衛生管理規程等に基づき、総括安全衛生管理者である筑紫地区協議会議長（大学院総合理工学研究院長）を委員長とする安全・衛生委員会（筑紫地区）を設置し、総括安全衛生管理者、衛生管理者、産業医等を配置し、筑紫地区事業場の安全衛生管理の徹底に努めています。

また、安全・衛生委員会委員による職場巡視では、年度計画で職場巡視箇所を計画し、毎月委員会終了後、職場巡視を行っています。筑紫地区の職場巡視の特徴として、各建物毎に職場巡視補助者を指名し、職場巡視補助者と一緒に巡視を行っていることです。

【毒物及び劇物の安全管理】

筑紫地区の各部局では、毒物及び劇物による事故や環境汚染の防止に備え、「毒物及び劇物取扱要項」を制定し、対象薬品等をこの要項に定めるところにより厳重に管理しています。

また、毒物及び劇物は、施錠可能な薬品保管庫を設置し、使用簿によりその使用状況を把握しています。

第2章 環境教育・研究と環境保全

環境月間行事

筑紫地区キャンパスでは、毎年5月または6月に筑紫地区オープンキャンパスを開催しています。このオープンキャンパスには高校生を含む多数の一般市民が筑紫地区キャンパスを訪れるため、「環境月間（6月）」前ではありますが、毎年オープンキャンパス前にキャンパス内の環境美化のために、各部署毎に建物周辺の草刈りや空き缶拾いを行っています。



第3章 エネルギー・資源の削減

エネルギー消費量と削減活動

筑紫地区におけるエネルギー消費量

筑紫地区における電力及び都市ガスの消費量について現状を把握し、今後の削減計画や方針を検討します。下表は電力及び都市ガスについて5年間のデータをまとめたものです。

【エネルギー年間消費量】

エネルギーの種類	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
電力 GWh	10.33	10.63	9.80	10.72	12.47
都市ガス 千m ³	41.65	38.96	35.16	36.88	39.16
合計(総使用量) TJ	102.7	105.5	97.3	106.3	123.5
延床面積 千m ²	80	80	80	81	81
面積当たりエネルギー使用量 TJ/千m ²	1.28	1.32	1.22	1.31	1.53

換算係数(電力) 1GWh=9.76TJ

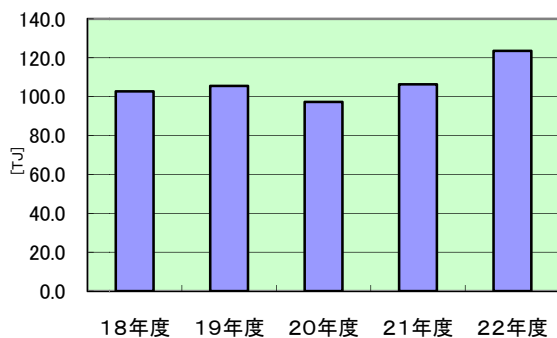
換算係数(都市ガス) 千m³=0.0461TJ

エネルギーの総使用量を出すため単位の違う電気及び都市ガスについて、使用したエネルギーを発熱量としてジュール(J)の単位に換算して合計を出しています。

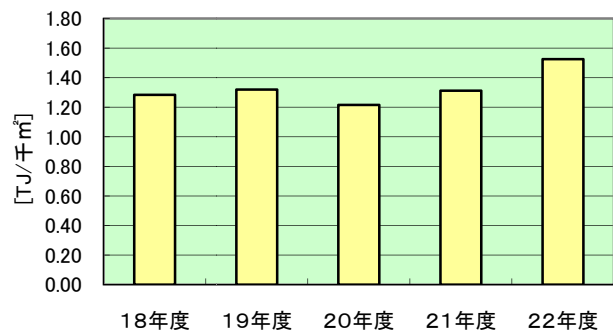
電力の換算係数は、「エネルギーの使用の合理化に関する法律第15条に基づく定期報告書記入要領(平成20年5月30日改訂)の係数を、都市ガスについては、供給元である西部ガスから提供された係数を使用しました。

単位 GWhのG(ギガ)、TJのT(テラ)は、各々10の9乗、12乗

エネルギー総使用量



面積当たりエネルギー使用量



◇エネルギー総使用量について、平成19年度のエネルギー総使用量が前年に比べ増えたのは、使用していなかった総理工E棟の一部の使用を再開したことと、先導物質化学研究所に所属する研究室の実験内容の変化にともないエネルギー使用量が増えたためです。その後も使用量は年々増加の傾向にありますが、平成20年度だけがエネルギー使用量が前年度に比べ7.8%減少しているのは、空調機の大幅更新等、省エネルギーへの取り組みが実を結んだ結果だと思われます。

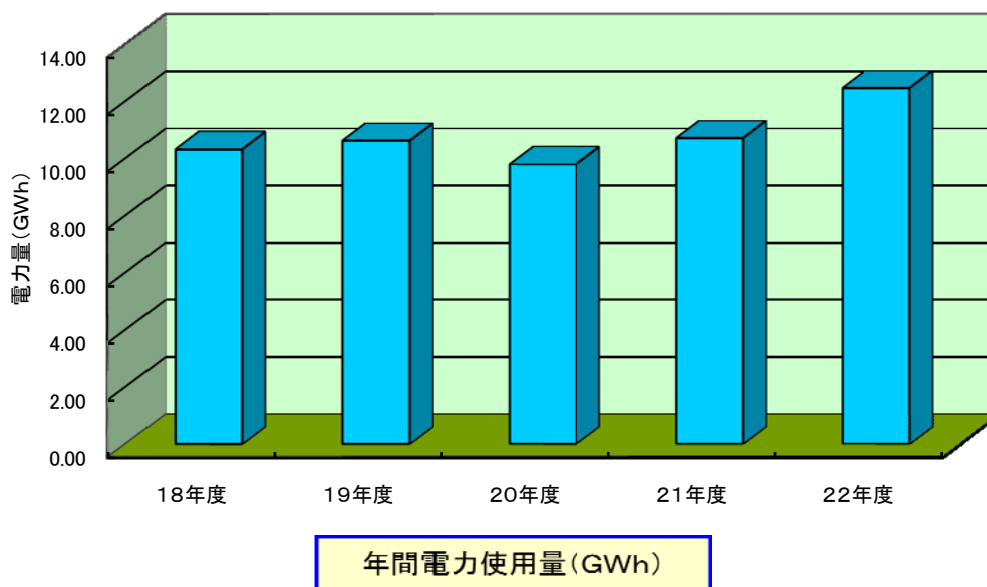
◇面積当たりのエネルギー使用量について、平成15年度から総合研究棟約9千m²が増えましたが、面積当たりのエネルギーの使用量は平成16年度から平成18年度までは年々減少していましたが、平成19年度以降増加傾向にある理由は、エネルギー総使用量の欄で述べたとおりです。

第3章 エネルギー・資源の削減

エネルギー消費量と削減活動

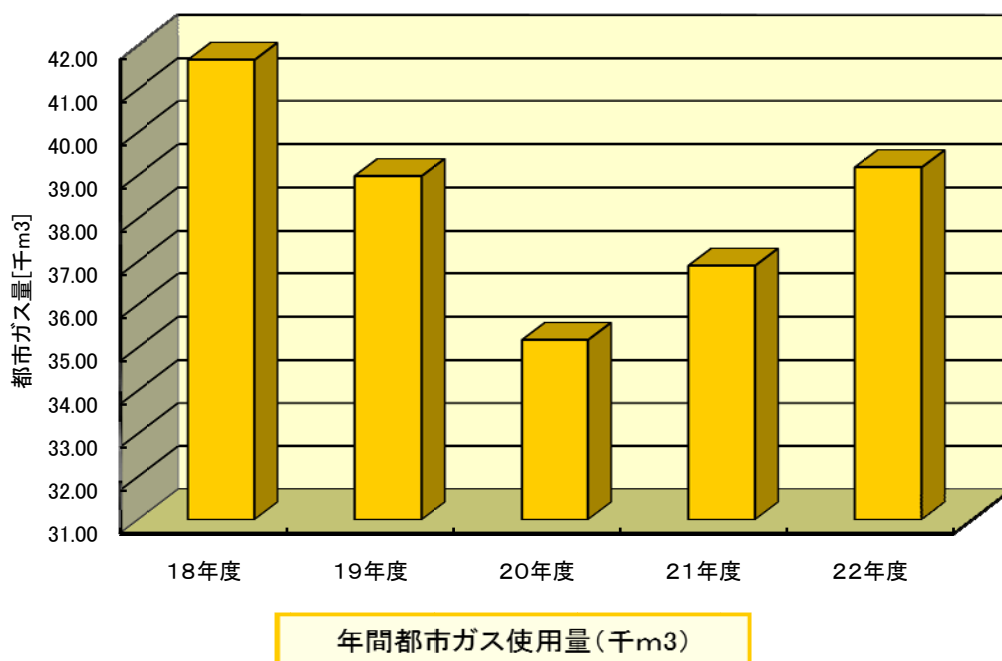
【 電力 】

電力使用量は平成16年度から年々減少していましたが、平成19年度以降はエネルギー総使用量の欄でも述べた理由により増加傾向にあります。平成20年度は、省エネルギーへの取り組み等により減少しましたが、平成21年度以降は実験内容の変化等、研究活動による使用量が増加とみられ、増加しています。大学の本分である研究活動による使用量の増については、やむを得ない部分もありますが、比較的削減しやすいその他の部分を含め、今後もエネルギー消費抑制のため、九州大学の定める「光熱水量抑制策」や「節電（消灯）に関するルール」を守り節電に向けて積極的に取り組んでいきます



【 都市ガス 】

平成18年度からは省エネルギーへの取り組みの効果から減少しておりましたが、平成21年度以降は再び増加傾向にあります。



第3章 エネルギー・資源の削減

エネルギー消費量と削減活動

エネルギー起源の二酸化炭素排出量

筑紫地区から排出された二酸化炭素排出量について、エネルギー使用量から算出した排出量は下表及びグラフの通りです。筑紫地区から排出される二酸化炭素のほとんどは電力の使用によるものです。

平成20年度の二酸化炭素排出量が大幅に減少しているのは電力の供給元が変わりCO2排出係数が変わったためです。

単位：t-CO

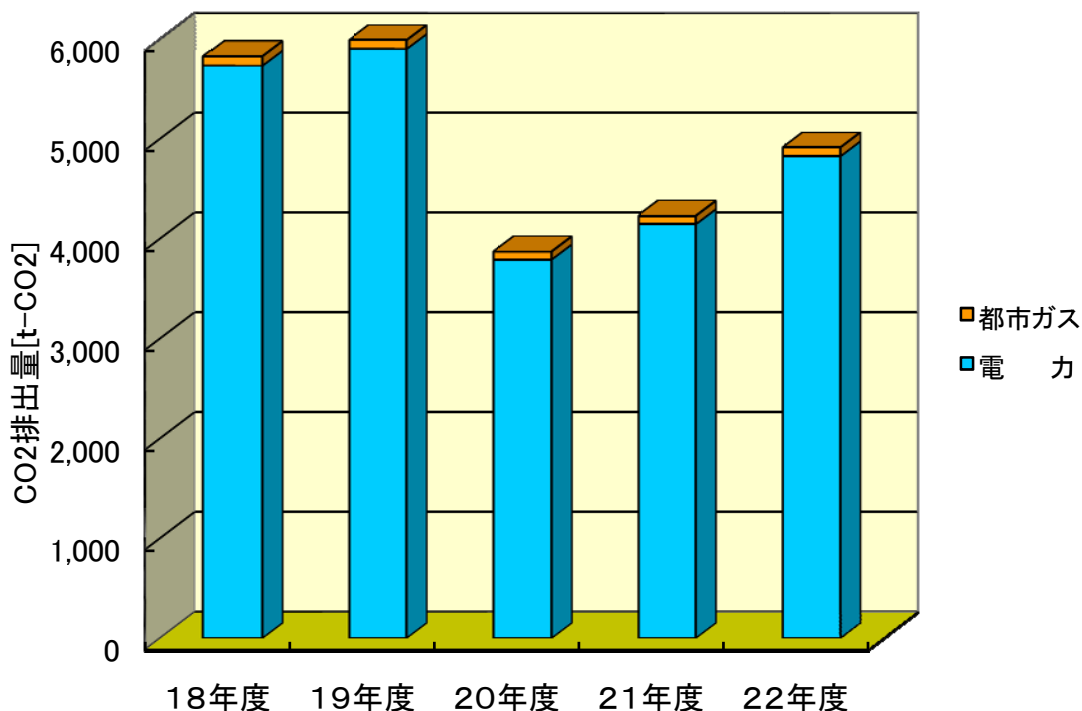
エネルギーの種類	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
電力	5,733	5,900	3,793	4,146	4,826
都市ガス	95	89	80	84	89
合計	5,828	5,989	3,873	4,230	4,915

CO2 排出係数（電力） 1MWh=0.555 t-CO2/MWh（平成19年度まで）

CO2 排出係数（電力） 1MWh=0.387 t-CO2/MWh（平成20年度）

CO2 排出係数（都市ガス） 1千m3=2.28 t-CO2/千m3

電力のCO2排出係数は、地球温暖化対策の推進に関する法律施行令（平成21年3月31日改正）の係数を、都市ガスについては、供給元である西部ガスから提供された係数を使用しました。



二酸化炭素排出量(t-CO2)

第3章 エネルギー・資源の削減

資源・エネルギー・廃棄物

平成22年度資源・エネルギー・廃棄物関係のデータ

エネルギー

電気	12,470,976	kWh
都市ガス	39,160	m ³
延床面積	81,185	m ²

水

上水道	18,588	m ³
地下水	22,800	m ³
再生水	47,565	m ³
下水道	46,754	m ³

用紙

A4換算	3,543	千枚
------	-------	----

(注)A4用紙以外は、A4に換算

古紙

新聞	1.85	トン
段ボール	5.04	トン
雑誌雑紙・他	21.48	トン

分別ごみ

	重 量	処理法
金属・陶器類	0 kg	再生
瓶・缶	3,862 kg	再生
ペットボトル	2,120 kg	再生
蛍光灯	487 kg	再生
乾電池	131 kg	再生
スプレー缶	13 本	再生
不燃ごみ	23 本※	埋立
疑似医療系	15 kg	再生
実験系可燃	58 袋※2	焼却
有害付着物	2 本※	再生

※ 本＝ドラム缶(200L)

※2 袋＝ビニール袋(60L)

廃棄物

	重 量	処理法
可燃ごみ	35.9 トン	焼却
瓶	143 本	再生
金属くず	23 本	再生
粗大ごみ	6.3 トン	再生
粗大ごみ	100.06 トン	廃棄

※ 本＝ドラム缶(200L)

その他、実験系廃棄物

	数 量	処理法
無機系廃液	2,640 L	再生
有機系廃液	12,026 L	焼却
廃薬品	466 本	埋立
廃ポンベ	0 本	再生

第3章 エネルギー・資源の削減

グリーン購入

グリーン購入法(国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律)に基づく特定調達物品、準特定調達物品等の購入実績。

平成22年度に調達したグリーン購入法適合製品

分野	摘要	調達量
紙類	コピー用紙等	14,550 kg
	トイレットペーパー	1,664 kg
文具類	シャープペンシル	209 本
	鉛筆	92 本
	ファイル	2,767 冊
	バインダー	43 冊
	ノート	310 冊
機器類	机	22 台
	棚	15 連
OA機器	記録用メディア	308 個

※実績の一部です。他品目についても環境物品等の調達を推進しています。

第4章 化学物質の管理

実験系廃棄物

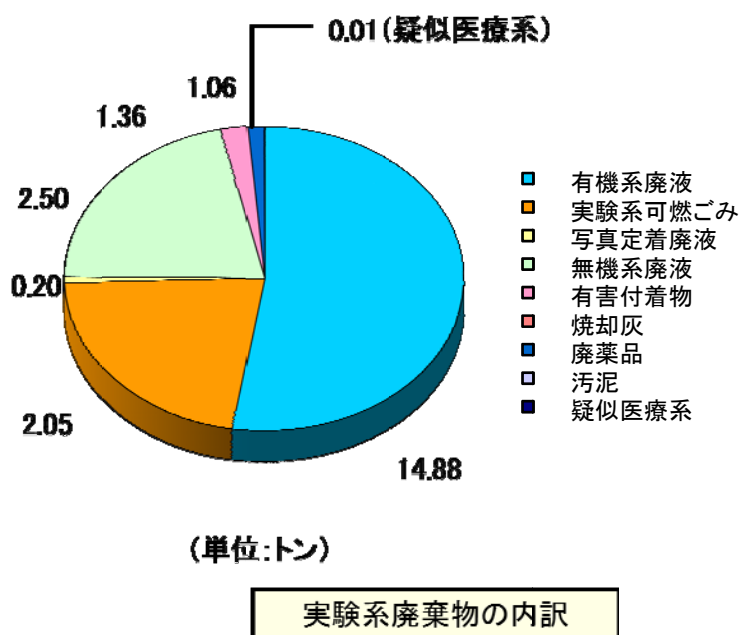
実験系廃棄物の資源化

実験・研究によって発生する様々な廃棄物は、産業廃棄物として本学と収集運搬業者及び処分業者と三者契約を結び、適正に処理し、安全を考慮し可能な限り資源化処理をしています。

実験系廃棄物の排出量

下表に平成22年度の実験系廃棄物を示しますが、総量は14.88トンとなっています。有機系廃液、無機系廃液で約4分の3を占めています。

廃棄物	排出量 (トン)	比率
有機系廃液	8.17	52.5%
実験系可燃ごみ	3.42	22.0%
写真定着廃液	0.10	0.6%
無機系廃液	3.32	21.4%
有害付着物	0.33	2.1%
焼却灰	—	0.0%
廃薬品	0.2	1.3%
汚泥	—	0.0%
疑似医療系	0.01	0.1%
合計	15.55	100%

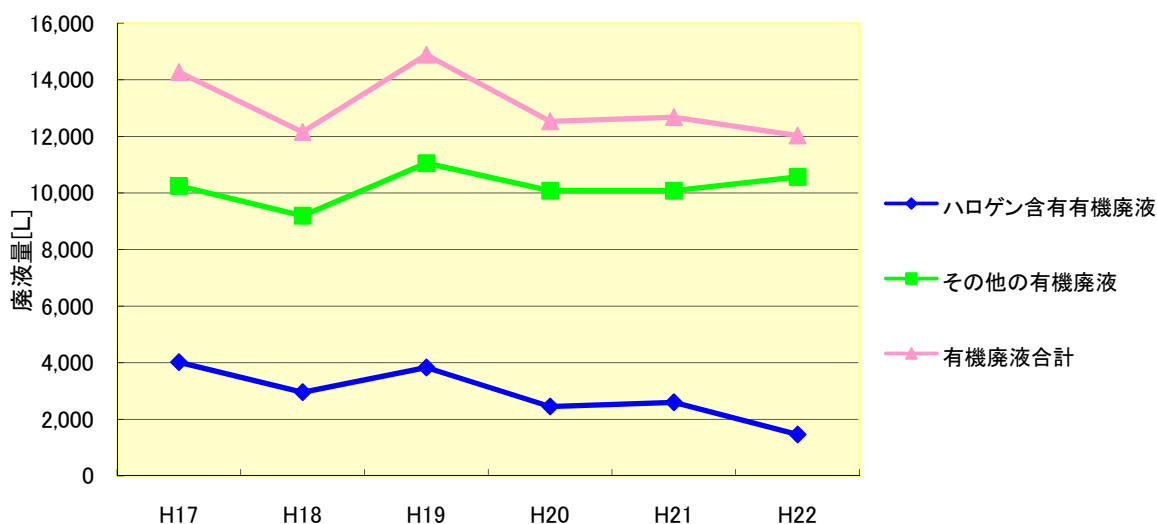


第4章 化学物質の管理

有機系／無機系廃液量の経年変化

【有機系廃液】

ハロゲン含有有機廃液は規制の強化により、平成18年度まで減少していましたが、平成19年度は研究内容の変化に伴い増加し、平成20年度以降再び減少しています。



【無機系廃液】

平成18年度から平成20年度に増加傾向にありましたが、21年度以降は一部を除き減少傾向にあります。

